国技を支えるこの情熱を見よ

# アマ翔（かけ）る！

## 〝世界〟の土俵から

### 世界選手権／世界女子選手権／世界ジュニア選手権／世界女子ジュニア選手権

第181回

ラグビーW杯で日本がスコットランドに勝ち、史上初のベスト8進出を決めて日本中が沸き立った10月13日、アマ相撲のメッカ、大阪・堺市大浜公園相撲場では、男女それぞれシニアとジュニアの世界相撲選手権大会が行われた。成績などはP82からの記事を見ていただくとして、ここでは、大会にまつわるいくつかのサイドストーリーを紹介したい。

（十枝慶二）

○午後からの準決勝以降を前に、メイン土俵で行われた開会式（上）。2日分の試合を1日で消化するため、午前中の予選は急遽、屋外（右下）、屋内（左下）のサブ土俵も使われた

### 2つの危機を乗り越えて

今回の世界大会は、2つの危機を乗り越えて開催された。

一つ目の危機は開催地の変更だ。当初、10月19～20日にハワイで行う予定だったが、現地の準備が遅れたことなどから、5月に入ってから日本での開催に変更すると決定。1週間早め、10月12～13日に堺で行われることになった。

準備期間は半年足らずしかなかったが、関係者は開催向けて力を尽くした。課題の一つが通訳の手配だ。世界中から集う人々は選手だけでも200人以上。かなり数の通訳が必要だ。そこで頼ったのが、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会だった。

英語能力を測定するTOEICの運営にかかわる団体で、語学力を礎としたグローバル人材育成事業にも力を入れ、国際イベントでの学生の語学ボランティアのあっせんも行っている。今回の世界選手権にあたって、大学を通じてボランティアを募集したところ、近畿大学、京都産業大学、神戸市外国語大学、京都外国語大学、関西外国語大学、神戸女子大学の学生が集まった。

そこに、関西の大学相撲部員も加わり、初対面の学生たちが互いの強みを生かして連携し、選手たちをサポートする姿が清々しかった。

こうして一つ目の危機を乗り越え、試合当日が迫った頃、再び危機に見舞われた。数十年に一度という威力の台風19号の接近だ。大阪は直撃こそ免れたものの、大会初日の12日に最接近する。関西圏のイベントも次々と中止が決まるなか、前日の11日に、堺市が大浜公園全体の閉鎖を決め、12日の大会中止が決定。ただし13日には台風が過ぎ、開催できそうな見通しとなった。

当初の予定では、12日に男女ジュニア、13日男女シニアの大会を行うことになっていた。これを守るなら、ジュニアは中止し、シニアだけの開催となる。しかし、せっかく世界各地から集まったジュニアの選手たちのために、何とか大会を開きたい――。

関係者が協議を重ね、ひねり出した案が、2つのサブ土俵の活用だ。堺大浜公園相撲場には、客席を備えた本土俵のほか、試合前のアップや普段の練習のため、周囲に屋外土俵と室内土俵がそれぞれ一つずつある。この2つのサブ土俵も使って試合を行えば、時間を短縮できる。

しかし、それは簡単なことではない。試合を行うには、審判長1人、主審1人、副審4人からなる審判団のほか、放送、記録、土俵整備などの人員も確保しなければならない。計3つの土俵を同時に使うということは、単純計算で、必要な人数がすべて3倍になる。また、個人戦と団体戦の両方に出る選手が多いため、スケジュールが重ならないような調整が必要だ。また、シニアとジュニア、両方のカテゴリーに出る選手もいるから、さらに配慮が求められる。

考えただけで気が遠くなりそうな作業だ。しかし、関係者が根気強くこの難題に取り組み、クリアした。当初、9時だった開始時間は8時半に繰り上げ、午前中に3つの土俵を使い、団体・個人各階級のすべての予選（準々決勝まで）を終了させ、午後は、準決勝以降を行う。なお、当日の朝、配られた予定では、午後は個人戦は本土俵、団体戦はサブ土俵で行う予定だったが、当日になってから、やはり準決勝以上はすべて本土俵で行うべきだとの声が出て、そのように変更された。

迎えた当日、進行上の問題がなかったとはいえない。特に2つのサブ土俵では、時間になっても選手が現れないことも何度かあった。しかし、大きな混乱はなかった。午後を本土俵のみで行うよう変更した影響で、終了時間が遅れはしたが、クライマックスの団体戦の盛り上がりは格別で、やはり本土俵で行ってよかったと思わせた。

そんな中で特筆されるのは、大相撲の行司役である主審をすべて外国人が務めたことだ。審判団の調整にあたった浦島三郎さんはこう語る。

「ロシアなどを訪問して、相撲の指導だけでなく審判講習会も行ったため、多くの方が熱心に受講してくれました。世界選手権は彼らにとって何よりの晴れ舞台だから、ぜひ、やりたいと言ってくるんですよ。その気持ちをくみました。技術的にも問題なかったと思います」

### 成長著しい台湾チーム

筆者が世界大会を観戦するのは、前回、日本で大会が開かれた平成27年以来4年ぶり。前回は、特に軽量級や女子選手のなかに、「相撲らしからぬ動き」をする選手も少なくなかった。レスリングのように頭を極端に低くしたり、柔道のようにすぐに腰に乗せて強引に投げにいこうとしたりする者もいた。

しかし、今回はそうした印象を受けることはほとんどなかった。きちんと腰を割り、基本の押しや寄りという土台が身についている選手が明らかに増えていた。

なかでも目立ったのが台湾だ。選手層が厚く、本格的な相撲を取る選手が多かった。とりわけジュニアの選手の活躍はめざましく、女子軽量級では台湾から初となる優勝者も輩出するなど、金1、銀1、銅1という、台湾としては過去最高の成績を残した。

「毎月1回、台北にある土俵に選手たちを集めて、土日に合宿練習をしています。練習は土曜の夕方と日曜の午前中の2回です」

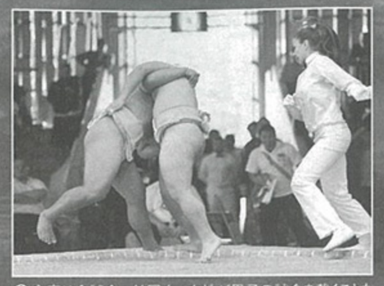
そう語るのは中華民国相撲協会理事長の李明峻さんだ。国際政治の研究者で、京都大学大学院への留学を機に相撲の魅力を知り、帰国後に相撲協会を設立。台湾での相撲の発展に尽力してきた。

台湾は、日本の占領下にあった時代に土俵がつくられ、相撲も行われていたが、終戦後に取り壊されていた。そんな土俵を復活させ、昨年は世界選手権を台湾で実施して成功に導いている。

「若い選手の発掘にも力を入れています。優勝したジュニアの選手もその一人です」

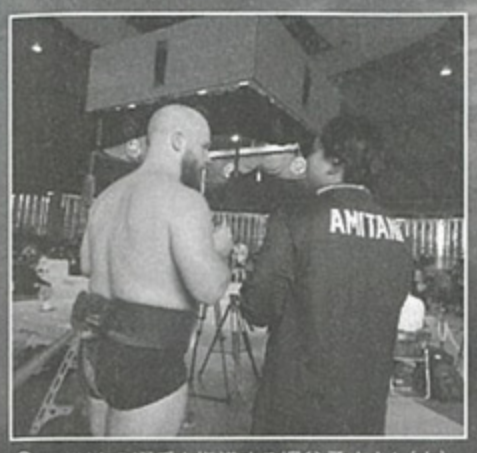
そう笑顔で話す李さんとともに会場に来ていたのが、劉朝

台湾相撲協会理事長の李明峻さん（左）と、元栃ノ華の劉朝恵さん



主審は全試合、外国人。女性が男子の試合を裁くことも珍しくない

学生の語学ボランティアと、大学相撲部員が力を合わせて各国をサポート



アメリカの選手を指導する網谷勇志さん（右）

ブラジルチーム。前列右から2人目がJICAボランティアで派遣されて相撲を指導する飯田浩之さん

外国の選手たちからは、心から相撲を楽しんでいる様子が伝わってきた

恵さん（57歳）。春日野部屋に入門し、栃ノ華の四股名で昭和60年夏場所に十両昇進。台湾出身初の関取となった人物だ。

「私は今、日本にいますが、台湾出身の後輩の力士たちのなかには、引退して台湾に戻っている人が何人かいます。彼らが指導をしてくれているんですよ」

継続的に練習する機会に加え、確かな指導者も得た台湾の相撲の今後が大いに楽しみだ。

## 海外で指導にあたる日本の若者に期待

日本代表の健闘も光った。成績などは82ページからの記事を読んでいただきたいが、特にジュニアは、男女とも団体優勝、男子は個人全階級も制覇と強さが際立った。

シニアも、金メダルこそ男女合わせて一つだけだったが、どの選手も上位に食い込み、力は存分に発揮していたと思う。一方、成績よりも気になるのが、年齢の問題だ。海外では30歳以上の選手が多く、結婚、出産後に復帰して優勝している選手もいる。それに比べて、日本の選手は若い。特に女子は全員、学生だ。それは、社会人になってから相撲を続けるのが難しいという、環境の問題もあるだろう。それに加えて、若い時から相撲に打ち込む結果、若い時期に燃え尽きてしまう選手が多いようにも感じられる。一方で、外国の選手からは、勝ち負けはともかく、相撲を心から楽しんでいる雰囲気が伝わってくる。こうした点は、日本が外国から学ぶべきなのかもしれない。

そこで心強いのは、日本を飛び出して相撲の普及に尽力している若者の存在だ。ブラジルチームの飯田浩之さん（24歳）は茨城県出身。専大松戸高から日体大と相撲部で活躍。卒業後は、相撲の指導者の道に進もうと考えていたところ、斎藤一雄監督から、JICAボランティアで、初の試みとして、海外に相撲指導者を派遣する試みがあると知り、応募してみることにした。

めでたく採用されてブラジルへの派遣が決まった。3カ月間、ポルトガル語の習得などの研修を経て、昨年7月に海を渡った。それから1年余り。住まいのあるサンパウロを中心に各地で相撲指導を行ってきた。ブラジルは、魁聖のように日系人の子孫も多く、海外のなかでは伝統的に相撲が盛んな土地柄で、土の土俵もいくつもある。

「日本人に比べると基本ができていないことが多いし、戸惑うこともありますが、やる気のある若い選手もいて、彼らから教えられることもあります」

と話す飯田さん。凱旋帰国となった今回の大会では、金メダルこそなかったものの、銀2、銅3のメダルを獲得。そのうち4つをジュニアで獲得し、伸びしろを感じさせる。来年7月には2年間の派遣期間を終え、日本に帰国する飯田さんのこれからが楽しみだ。

アメリカチームのコーチを務めていた網谷勇志（あみたにたけし）さん（27歳）は、鳥取西中で中学横綱に輝き、鳥取城北高から日大で活躍。卒業後は、語学を学びにアメリカに渡った。そこで相撲への思いを新たにし、20年の歴史を誇り、数千人の観客を集める相撲の国際大会「US SUMO OPEN」に参加して4年間で2回の優勝。その傍ら、ロサンゼルスで相撲道場のコーチを務めている。

「マット土俵で週1回、指導をしています。毎回、15～20人くらい来ますよ。子供でなくて大人がほとんどで女性も多い。今回のアメリカ代表にも女性の教え子が3人います。残念ながらメダルは取れませんでしたけれど、アメリカの相撲熱は、日本の皆さんが思うより高いと思います」

そんな網谷さんは、YouTubeで「あみた！の相撲ちゃんねる」を開設して相撲に関するさまざまな情報を発信。世界選手権直前にアップした動画では、来年、日本に帰国する予定であることを発表。帰国後の夢として、

・フリーの相撲コーチ
・大人向けの相撲クラブ設立
・賞金付の相撲大会をつくる

という3つを語っている。すでに、自由な発想と行動力を発揮してきた網谷さんだけに、これから、新しい形での相撲の普及、発展していってくれることを期待したい。